

巻頭写真 中米パナマで見た植生と生物多様性保全

Vegetation and biodiversity conservation in Panama, Central America

2013年1月に中米のパナマ・コスタリカの植物を見る機会があった。ここではパナマの二つの訪問地について簡単に紹介する。

パナマは北米と南米を繋ぐパナマ地峡にあり、その最も細いところに全長約80 kmのパナマ運河がある。これは川をせき止めて標高26 mのダム湖(Gatun湖)を作り、北の大西洋(カリブ海)と南の太平洋との間を開鑿し、3箇所の開門で水位を調整しているものである。この人造湖の最大の島Barro Colorado(およそ北緯9度、西経80度、面積約15 km²)が自然保護区になったのは1923年である。この島はもともとはダム湖予定地内の小高い山に過ぎなかったところである。パナマ運河は1914年に開通したが、大量の人員と資材が投入され大規模な工事が行われ、当然のこととして運河ルート沿いの熱帯林は土木資材と労働者の燃料などのためにほとんど伐採し尽くされた。従って90年前に自然保護区となったもののBarro Coloradoには「原生林」と言えるものは無く、全島が二次林である。しかしここにSTRI(Smithsonian Tropical Research Institute)が作られ、全島の自然保護・生物多様性保全とともにすべての生物を対象として生態学を中心とする生物科学研究のフィールドとして機能することになった。

島の船着き場に「研究村」があり、「本土」からSTRI専用の船で行き来するので一般の立ち入りは出来ない。研究者や学生、それらをサポートする人など沢山の人がこの島に「定住」しており、本部施設や食堂、研究棟、宿舎など数十の建物があり、また新たな建設も行われている。Visitorは事前に申し込み、船の発着時間に本土側の棧橋に集合し、ガイド付きで島に渡る。島では始めに概要をスライドで説明され、そしていよいよ島内の観察に向かう。訪れた時期は乾期で乾ききっており、「悪い虫」などはほとんど居なかったが、雨期にはきつと凄いとところなのだろう。様々な新大陸の熱帯の植物がはびこっており、何の仲間かすぐに分かるのはほんのわずかである。この二次林は樹高30 mほどで、林内は蔓植物が非常に多く、樹木の

密度は高いが、幹が1 mを越えるような大きな木は少なく、いわゆるJungleである。板根を発達させるもの、幹生花を着けるものなど様々だが、下から見える範囲に花がついてい



写真1 Barro Colorado自然保護区の説明をするガイド。



写真2 Barro Coloradoの林内。林冠は鬱閉し、木は細く、蔓植物が多い。



写真3 恐らく「島内最大」の樹木 *Cavanillesia platanifolia*。今はアオイ科所属だが前はパンヤ科に入れられていた。幹の肥大成長が早い材はスカスカ。

るのが分かる樹木は少なく、落下した花でようやくその存在が分かる。動物相は豊富で、3時間ほどの観察路行程中に2つの異なった種類の猿の群れを樹上に見た。足下にはハキリアリやグンタイアリの列が見られたが乾期のためかヤドクガエルには出会えなかった。直径20 cmほど以上のすべての木にタグがついて戸籍簿が作られており、また、林内各所に様々な観測装置や調査コードラートが設置され、学生とおぼしきグループが調査機材を運んでいたり、枝を下ろして葉をもいで現存量の計測をしたり、活発な研究活動がなされているのを目の当たりにした。こういったところで何年もかけて思う存分調査したら実にいろいろなことが分かってくるのだろうと思う。

数日後、パナマシティから東のEl Valleという町に移動した。ここにはパナマ地峡の脊梁山脈にある古い火山のカルデラの底で標高550 mと涼しいので避暑地として使われている。APROVACA (Association of Orchid Producers of El Valle and Cabuya) というNPOのランセンターを訪れた。この組織は日本人がJICAによる派遣事業で立ち上げたもので、それまで(今でも)村人がこの地域の豊富な野生ランを売って生計を立てていたのに対し、この組織のランセンターで保護された野生ランを増殖して現地に植え戻しを行うなどの事業をするとともに、ランセンターの入園料収入や、コショウランなどのいわゆる観賞用ランも栽培して売って収入を得て、野生ランの保護保全とともに今までそれを売って生計を立てていた彼らの収入を保障し、更に発展してパナマの野生生物保護保全をしながら観光立国にしようというものだと理解した。翌日にはこのメンバーのガイドでカルデラの外輪山であるGaital山の展望台(935 m)まで上った。ここがパナマ地峡の脊梁山脈のまさに「リッジ」であり、乾期の今は常に北のカリブ海から強い風が吹き付けていつも雲が発生しているの



写真4 El ValleのAPROVACAランセンターの入り口。園内にはパナマの稀少な野生ランの世界一のコレクションが生品展示。グループでいくと職員がガイドしてくれる。この入り口の紫のランは一斉開花の特質を持つ *Sobllaria decora* でももちろんパナマ固有種。



写真5 Gaital山の尾根近くの雲霧林。樹高は低いが、幹や枝は厚く苔むし、多種多様の着生植物が群がって着き、着生植物が着きすぎた枝はしばしば折損し、落下している。この落下した枝のランを保護する。

で雲霧林が非常に発達している。勢い着生植物も極めて多く、実に多種多様なラン、アナナス科、シダ類、そして着生サボテンまである。APROVACAはこの山から採ってこられたランを増殖し、それを(着生ランなので)樹上に植え戻している。植え戻し自体が個体群回復に実際どれほどの効果があるか多少とも疑問だが、現地の人達が自分たちの手で育てて植え戻すと言う事業をやることは、他の村人達の野生採取に対する大きな抑止力になり、生物保護の考えに繋がることは間違いないだろう。自然保護と人びとの生活、これをまのあたりにした旅であった。(鈴木三男 Mitsuo Suzuki)



写真6 雲霧林の樹木にAPROVACAにより植え戻されたラン。植え戻したランが再び盗られるかどうかは聞きそびれた。